2022年度

慶應義塾湘南藤沢高等部入学試験問題

国　　語
(小論文)

	万位	千位	百位	十位	一位		
受験番号						氏名	

注　意　1.　受験番号と氏名は，問題用紙および解答用紙のそれぞれに必ず記入すること。

2.　受験番号は，所定欄の枠内に一字一字記入すること。
また，解答用紙の右下の ○ の中に受験番号の一の位の数字を記入すること。

3.　解答は，必ず解答用紙の所定の欄に記入すること。

4.　問題用紙の余白は下書きに用いてよろしい。

5.　この冊子の総ページ数は 4 ページである。

《指示があるまで開かないこと》

およそ三〇〇年前にジャーナリズムが誕生して以降、一貫して変わらない最重要の原則がある。それは、ジャーナリズムにおいては、市民に提供される情報が創作ではなく、事実＝本当にあったことでなければならないという原則である。ジャーナリズムの九原則の第一項に挙げられた「ジャーナリズムが第一に責任を負うべきものは真実である」がこれである。

ジャーナリストは事実をつかむことに全力を挙げ、事実を伝えるのが使命である。また、ジャーナリストはストーリーを構成し、意見を述べることもあるが、その場合でも事実に基づいてストーリーを構成し、事実に基づいて意見を述べなければならない。そして、その事実は「真実」でなければならない。小説やドラマは、それがどんなに優れた作品であっても、事実によって構成されてはいないのでジャーナリズムではない。

市民との間でこうした約束があるからこそ、ジャーナリズムにおいてフェイクニュース（虚偽情報）は許されない。本書でも後に少し触れるが、フェイクニュースを見抜くには様々なテクニックがあり、近年は「フェイクニュースの見抜き方」に狙いを絞った優れた著作も相次いで出版されている。

しかし、フェイクニュースに騙（だま）されさえしなければ事実に辿（たど）り着けるのかというと、そうではない。「事実とは何か」という問題は、突き詰めて考えていくと、実はいくつもの複雑で難しい問題を含んでいる。そこで本章では、ジャーナリズムの生命線である「事実」という問題について考えていきたい。

まず、次の三つの短い言葉（命題）を読んで欲しい。

（一）白い鳥は白い
（二）白い鳥は飛べる
（三）白い鳥は美しい

三つの言葉はいずれも白鳥について説明したものだが、全く性格の異なる言葉である。（一）の「白い鳥は白い」は議論の余地のない命題である。私が「白い鳥は白い」と言おうが、あなたが「白い鳥は白い」と言おうが、結論は「白い鳥は白い」しかない。「白い鳥」は「白い」から「白い鳥」なのであって、「白くない鳥」は「白い鳥」ではない。このように形式的な証明手続きによって真偽が判定できる命題を分析命題という。

私たちが日常生活でメディアを通じて様々なニュースに接する際、この「白い鳥は白い」や「一＋一＝二」のような分析命題について、その真偽を敢（あ）えて考える必要はほとんどない。「一＋一」がなぜ「二」なのかを証明するのは、ひとまず数学者や哲学者に任せておこう。

私たちがニュースに接した際、その内容の真偽が問題になるのは、（二）の「白い鳥は飛べる」のような言葉（経験命題）に接した時である。なぜなら、「白い鳥」の中には白鳥のように「飛べる鳥」もいるし、養鶏場で飼育されているニワトリのように「ほとんど飛べない鳥」もいる可能性があるからである。したがって、私たちは「白い鳥」が飛べるのか飛べないのか、飛べる鳥と飛べない鳥の両方がいる

のか――などを文献などに当たって調べたうえで、「白い鳥は飛べる」の真偽を判定しなければならない。

白い鳥が飛べるか否かを判定するだけならば、大半の人が鳥類図鑑や鳥類に関するウェブサイトなどにアクセスして情報を集め、容易に真偽を判定できるだろう。

しかし、現実の世界には、事実を確定させることが難しい情報が溢れ返っている。真偽を判定するために実験が有効な場合もあるが、社会的な事象については実験が不可能なケースがほとんどである。例えば、「水は0℃で凍る」という情報の真偽は実験によって確かめることができる。だが、目撃者も物的証拠も存在せず、本人が犯行を否認している殺人事件で、「真犯人はA氏である」という命題の真偽を判定することは極めて難しい。実験によって殺人事件そのものを再現することはできないし、可能な限り多くの証拠を積み上げることによって裁判でA氏が有罪宣告されたとしても、それはあくまでも「仮説」の域を出ておらず、将来、真偽が逆転することもあり得るのである。

「白い鳥は飛べる」のような言葉（経験命題）の真偽を判定する際の問題はそれだけではない。真偽を判定するために様々な関連情報を集める作業の中には、人間の価値観、感情、政治的思惑などを完全には排除できないケースがある。その結果、何が事実かを巡って人々の間に対立が生じ、複数の「事実」が乱立することすらある。例えば、次の文章を読んで欲しい。

「○○紛争の際に、A国の軍隊が虐殺したB国の民間人の死者は××人である」

A国とB国の間で戦われた○○紛争が泥沼化し、両国政府ともに犠牲者の正確な数についての統計を持たない状態になったと仮定しよう。この時、A国軍によって虐殺されたB国の犠牲者数××人を巡って、現実にはしばしば次のようなことが起きている。

戦時であっても子供を含む多数の民間人を虐殺することは、法的にも道義的にも許されることではない。加害者であるA国の政府も国民も、その原則は重々承知しており、内心では自国軍による虐殺を恥ずべき行為だと感じている人も少なくない。自国の軍隊が多数の子供を虐殺するような卑怯者の集まりであることを認めるのは、耐えがたい苦痛である。このため、加害者であるA国の政府と国民には、犠牲者数をできるだけ少なく見積もりたいという心理が働きやすい。（中略）

一方、被害者であるB国では、これと逆の力が働きやすい。B国の政府と国民にとっては、多数の子供を含む市民を殺害したA国は憎い存在である。さらにB国の政治指導者にとって、A国軍による虐殺の過去は、さまざまな局面で使える「カード」でもある。例えば、経済状態の悪化で国民の不満の矛先が政府に向かおうとしている時、A国軍による虐殺の過去を声高に宣伝し、国民の怒りの矛先をA国へ仕向けることもできるだろう。（中略）

記録の不備や散逸といった問題がある中で、戦後長い時間が経過し、目撃者や証人が相次いで他界していけば、はたして何人の市民が

犠牲になったのかを正確な「事実」として確定することは元より難しいというほかない。（中略）

ここまで見てきたように、（二）の「白い鳥は飛べる」のような情報（経験命題）が事実か否かを確定するだけでも、現実の社会では容易ではない。では、（三）の「白い鳥は美しい」という情報（価値命題）についてはどうだろうか。

（三）の「白い鳥は美しい」は、個人の主観に基づく主張、意見、感想を述べたものである。「白い鳥」の中には「美しい鳥」も「美しくない鳥」もいるだろうが、そもそも美に絶対的な基準は存在しない。私にとって「美しい」鳥も、読者のあなたにとっては「美しくない」鳥かもしれない。「美しい」か「美しくない」かは価値判断の問題である。人間が一〇人いれば一〇通りの、一〇〇人いれば一〇〇通りの価値基準があり、その価値基準に基づく価値判断（意見・感想）がある。したがって、主張や意見や感想は人の数だけ存在する。

十人十色の価値基準に基づいて意見や感想を発する時に一番大切なことは何か。それは、その意見や感想の内容以上に、その発言者が「どこの誰なのか」という実名性が担保されていることである。なぜなら、わずかでも価値判断を含む発言は、その発言の責任を引き受ける個人を離れては存在し得ないからだ。「何を言ったか」だけでなく「誰が言ったか」が明確にされ、発言者が発言の責任を引き受けない限り、その言葉の本当の意味は確定できない。

例を挙げてみよう。あなたがある日、スマホで「菅義偉（すがよしひで）総理大臣の新型コロナ対策は間違っている」という発言を見つけたとする。この発言の結論部分の「間違っている」は主観に基づく価値判断であり、何かの事実について述べたものではない。つまり、「菅義偉総理大臣の新型コロナ対策は間違っている」は、（三）「白い鳥は美しい」と同じ性格の言葉である。

（白戸 圭一『はじめてのニュース・リテラシー』による）

※ 出題の都合上、本文の一部を改稿しています。

◆散逸　まとまっていたものが、ばらばらになってなくなること。

◆担保する　保証すること。

【問】 次の言葉の意味することは、発言した人の属性（立場・世代など）によってどう変わりますか。明らかに意味の変わる複数の実例を挙げながら、五〇〇字以上六〇〇字以内で論じなさい。

「女性差別なんて気にしてはいけない」

◇原稿用紙の使い方に従い、適宜段落分けをすること。

◇引用する場合は「　」でくくること。但し、引用の字数は全体の二割以内にとどめること。